早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」主催
「既存荘園村落情報のデジタル・アーカイブ化と現在のＩＴ環境下における研究方法の確立」
（基盤研究Ａ、研究代表者・海老澤衷）の初年度研究集会

「科研：既存荘園村落情報」キックオフ・シンポジウム

「既存荘園村落情報に関するクラスターモデルの構築に向けて」報告書

日時：2015年9月9日(水)13時00分～17時30分
会場：早稲田大学戸山キャンパス 33 号館 6 階第 11 会議室（シニアコモンルーム横）

【企画趣旨】

研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」では、広く日本文化を研究するにあたって科学研究費の積極的な活用を考え、本年度から 4 年間で既存荘園村落情報のクラスターモデルを構築することとなった。その際、美濃国大井荘・茜部荘をフィールドとし、GIS の積極的な活用を進めていく。

【プログラム】

●13：00～13：10

趣旨説明

司会　海老澤衷（早稲田大学文学学術院教授）

●13：10～13：50

白川宗源（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）
「美濃国大井荘・茜部荘の文書資料リストについて」

●13：50～14：30

田島　公（東京大学史料編纂所教授）
「古代美濃国荘園公領関係史料の再検討と条里・荘域復原研究の現状
　　－安八郡東大寺領大井荘成立の歴史的背景を中心に―」

●14：30～15：00
〈コーヒーブレイク　、シニアコモンルーム〉

●15：00～15：40

出田和久（奈良女子大学人文科学系教授）
「奈良盆地の条里・条坊史料とGIS利用の可能性」

●15：40～16：20

海老澤衷（早稲田大学文学学術院教授）
「国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査とデジタルアーカイブ」

●16：30～17：30

討論

【報告要旨】

白川宗源（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

「美濃国大井荘・茜部荘の文書資料リストについて」

『岐阜県史　史料編　古代・中世3』に採録されている「東大寺領美濃国茜部荘古文書458点・補遺21点と「東大寺領美濃国大井荘古文書」979点・補遺24点の計1482点を編年に配列したものを基礎とする。『岐阜県史』は「大井」「茜部」が見えるものを採録しているが、古文書のみの収録に留まり、古記録については収録されていない。加えて、編集時点（1960年代後半）における史料整備の状況に鑑みれば、新たに目録を作成する必要がある。

田島公（東京大学史料編纂所教授）

「古代美濃国荘園公領関係史料の再検討と条里・荘域復原研究の現状
－安八郡東大寺領大井荘成立の歴史的背景を中心に―」

大垣市教育委員会と連携をもち、大井荘の古代・中世の荘域を確定する。特に成立当初の「北限」である「川口」を確定させ、永仁3年(1295)6月作成の所謂「実検馬上取帳案」（早稲田大学所蔵「美濃大井荘実検馬上取帳案」）の書誌的研究を進める。さらにまちづくり工房大垣歴史観光グループ・大垣市文化財保護協会などと連携をとり、大井荘関係のシンポジウム・公開講演会を開催し、研究成果を市民に還元する。

出田和久（奈良女子大学人文科学系教授）

「奈良盆地の条里・条坊史料とGIS利用の可能性」

奈良女子大の21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」で推進されたアークGISシステムによるデータベース化の方法を明らかにし、今後の条里制研究や荘園研究におけるデータ蓄積・分析の方向性を示した。具体的には、①古代の郡界線の復原、②坪内の土地利用とその変遷、③荘園の荘域の推定、④寺領経営の実態分析、⑤集落の形態、⑥種々の地域性などである。文書の比較検討などには高度の専門性が要求され、またGISの専門家が必要。

海老澤衷（早稲田大学文学学術院教授）

「国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査とデジタルアーカイブ」

豊後国田染荘においては法務局高田支局の字図を大量にコピー、小字の領　域で切り抜き、接合。小字内地名については 100%聞き取り、「小字境界図」（5000 分の 1 森林基本図に空中写真から畦畔記入）にドットで落とす。小字と小字内地名を併せて８５８カ所。備中国新見荘においては、法務局高梁支局にて荘域土地台帳をすべてデジタル撮影。市役所税務課の航空写真図（A3判、地番の境界が入る。有償）の活用。伝統的な切絵図を参照する。小字５１４６カ所をＧＩＳソフト地図太郎に入力。

【討論要旨】

科研の正式テーマは「既存荘園村落情報のデジタル・アーカイブ化と現在のＩＴ環境下における研究方法の確立」（研究代表者・海老澤）である。従来の荘園村落に関する情報は、1978年の「圃場整備事業に対する宣言」などのいくつかの画期を経て蓄積されてはいるが、わずかな体系性があるだけで、限りなく広がる星雲のような状態となっている。これを束ね直してデジタル化することと、様々なツールが発達した現代の荘園調査の方法的モデルを作ることが今回の科研の目的である。後者のフィールドとして美濃国大井荘と茜部荘を選び、シンポジウムのテーマを「既存荘園村落情報に関するクラスターモデルの構築に向けて」とした。初年度の研究集会として関係者35人が参加した。

（とりまとめ：張　勝蘭）